

生 活 と 律 動

八 木 真 平

本学論叢第一号に「音楽美と学生歌」について信ずるところを述べ、学生歌「その一」の作曲を発表した。続いて第二号には「社会生活と歌唱」と題して、いろいろ過去の教育活動において得た経験と、合唱の社会生活に及ぼす影響を記して、更に学生歌「その二」の作曲を発表したのである。

本号においては、最近の作曲による学生歌「その三」（作詩は学生の由比浜恵子）を掲載し、これに加えて生活と律動に関して少しばかり論じたい。

音楽を構成する重要な要素は云うまでもなく旋律（Melody）と律動（Rhythm）と和声（Harmony）である。この三つの要素が相互に組み合いからみ合って、しかも適当な調和を保ちつつ進行することによって、人間の心の深奥を揺り動かすものである。従ってこの三つの要素の必要度において軽重はない。しかし律動は音楽の根本的なもので、しかも先天的、普遍的な要素である。これが根本的であるという理由は、音楽で旋律や和声がなく、律動のみでも音楽として成り立つことがあっても、（勿論不完全であるが）律動なくして音楽の成り立つことがないからである。先天的とはそれが何等の訓練なしに、それ自身人間に顕現するからであり、普遍的とはそれがどの如何なる音楽にも現われるからである。又律動は最も古い要素であることも考えられる。即ち原始民族の粗野なダンスは組織的な音楽よりも以前に行われていたからである。

律動に関する感応は単に音楽に存するばかりでなく、およそ時間的な運動のすべてに伴うところの心理的現象である。それだから音楽に何の関係もない時計の振り子の音にもリズムを感じ、エンジンの振動にも、或は列車の車輪の響きにも律動を感じるわけである。この人間の心の奥深くに感応を起すところの

律動を、最も鋭敏に、最も自然的に、然かも充分注意深く感応する人でなければ音楽修業の資格がないといいたい。

音楽を意識的に聞き心から楽しむためには、リズムに対する感応を深くすることが大切で、然かもこれは幼少の頃から充分に体得させておくことが肝要である。リズムは先天的でもある故に、生後半年位いの赤ん坊でも既にこれを感じずるものである。例えば、玩具のガラガラは手に持たせて雑音を出させることよりも、かえってこれを天井から寝ている上に吊してやって、左右に振ってやる方が乳児をあやすのに遙かに効果的であることがある。これは早や簡単な二拍子のリズムを感じている証拠である。

これから少し成長して3、4才になると、物をたたいてリズムを感じ、或は単純な唱歌を身振りと共に歌うことによって楽しむ生活が始まる。小学校1、2年においては主として打楽器やリズム楽器の合奏を楽しむようになって、やや音楽的な生活が出来る。これが次第に進歩して、これと併行しながら旋律楽器を楽しみ、又和音の成立をよろこぶようになって急速な発展を遂げるわけである。音楽を学ぶ者にとってリズム感の鈍い者は音楽そのものを殺すものであるといわれる理由はこれで明瞭であろう。歌唱に際しては常にこの律動をよく感じて歌うのでなければ充分な音楽美、楽曲の特徴等を表現することは困難である。殊に多人数で合唱を楽しもうとする時は、一層このことが大切で、メンバーの一人一人がよく感応しなければならない。又作曲の上からもこのことを心して作曲すべきである。

この意味で今度の学生歌「その三」は軽快な二拍子を採用した。それに弱拍部起りの型式を用いて一層快活な感じを助けている。終りの八小節を二部合唱にしたことも短大学生にふさわしいもので、若い学生がその青春をたたえ、その生活を楽しむために役立つことを期待している。これは既に先日読売テレビからも放送されて好評を得ている。

学 生 歌 (その三)

作 詞 由 比 浜 恵 子
校 関 加 藤 順 三

1

つきせざる 清水のごとく
わきいづる さやけきのち
あふれくる 若きちからを
信じつつ
われらはつどふ
ゆたかなり 甲南の空
もろともに 蔭をつくりて
伸びゆかむ みどりの若木

2

とこしへに 変ることなく
はるかなる 行く手をてらし
かがやける 光のみちを
いざゆかむ
教えのままに
恵まれし 甲南の園
ともどもに 分ちあはむ
喜びに あふるるところ

甲南女子短期大学

学 生 歌

(その三)

由比 浜 恵子 作詞
加 藤 順 三 校 閲
八 木 真 平 作 曲

♩ = 66

やさしく情をこめて

1. つ き せ ざ る - し み づ の ご と く
2. と こ し へ に - か は る こ と な く

わ き い づ る - さ や け き い の ち
は る か な る - ゆ く て を て ら し

あ ふ れ く る - わ か き ち か ら を
か が や け る - ひ か り の み ち を

mf *f*

しんじ つつ われらは つどふ
いざゆかむ おしえの ままに

mf *f*

dolce

ゆたかなり - こうなんのそら
めぐまれし - こうなんのその

dolce

mf

もろとも に - かげをつくりて
ともども に - わかちあは - む

mf

f

のびゆかむ - ゐどりのわかぎ
よろこびに - あふるるこころ

f